兵庫教育大学　研究紀要　第61巻　2022年９月　pp. 1－17

高橋邦三の「生理心学」
―或いは近代日本における骨相学の歴史的意義に関する一考察―

Takahashi Kunizō's "Physiological Psychology": On the Historical Meanings of Phrenology in Modern Japan

平　野　　亮*
HIRANO Ryo

This paper is the second of my discussion of a concrete example of phrenology in Japan, the lectures and articles on phrenology by TAKAHASHI Kunizō (1861-1913). In the late Meiji era, many educators began to hope for a new scientific approach to education. After returning to Japan from London in 1895, Takahashi actively promoted phrenology, which he called "physiological psychology" (usually translated as *kossōgaku*, which sounds like a technique for fortune telling), especially to educators of the time. There was a possibility that they could use the knowledge to deal with students' mental problems and for vocational guidance. In those days, "nervous depression" became a common social problem for people in many age groups. Also, after the class system of the Edo period was abolished, some Japanese (especially those who were supposed to live as *bushi* warriors), had to discover new identities or know what their talents were to enable them to select jobs in the new Meiji society. For Takahashi, phrenology might have been such a real and useful science. But in fact, phrenology never became as popular in modern Japan as it did in the 19th-century Western world.

キーワード：生理心学／骨相学，養生／衛生，進路指導，自分探し，心の能力
Key words：phrenology, hygiene, vocational guidance, self-discovery, faculties of the mind

はじめに

本研究の目的は，日本の骨相学者・高橋邦三（1861-1913）の人生とその言説に着目し，"近代日本における骨相学（Phrenology）の受容と展開" について，個別具体的な相から検討することである。第１編となる前稿では，高橋の生涯を複数の史料を用いて描出した[1]。続く第２編となる本稿では，第一に，高橋の発表した論考，『私立兵庫県教育会雑誌』掲載の５本（1898-1900）及び『教育公報』掲載の３本（1907）から彼の骨相学論を整理・分析する。第二に，前稿の議論を土台にして，高橋邦三なる人物がなぜ骨相学に魅入られたのか，延いて，明治期の日本にとって骨相学は何であり，また何たり得たのかということについて，総合的に考察する。

１．骨相学／生理心学というサイエンス

最初に「生理心学」という用語について見ておく。高橋は自身の専門を「骨相学」とは呼ばなかった。この翻訳語は，明治中期にはある程度は通用していたとみられるが[2]，フレノロジーの原義が "心理学" に近いことを重視する立場から見れば，"占い" の匂い濃い「骨相学」の字は誤解を招く悪訳と映ろう。"真正の科学" たるフレノロジーの性格は「生理心学」の名称こそがよく伝える，というわけだ。

> 脳の発達が頭蓋の外形に顕わるゝものなりと説く所よりして之を脳蓋学或は骨相学抔と名付くる者が出で此類の名称より段々誤解を来し心の働が骨の形に現はれやう筈はないなどゝ頭ごなしに之を排斥してしまふ人が多くあります……私は斯学の性質より考へて之を生理的心理学或は略して生理心学と申たらば左様の憂もなく略ほ当を得やうかと思ふのです[3]

高橋が骨相学と初めて出会ったのは，おそらく19世紀末ロンドンにおいてであった。今日では似非科学（pseudoscience）の筆頭格のようにも扱われる骨相学に，"真正の科学" として当時の人々が出会う余地は，最早存在しなかったと思われるかも知れない[4]。確かに，当地での展開のピークは世紀前半のことであり，往時の隆盛は既に去っていた。殊に，1830年代には見られたような，大学や医学校の講義に骨相学書が用いられるような象徴的な光景ならば尚更である[5]。だが実際，その頃の英国において科学におけるその正統的位置の全てが失われていたわけではない。高橋が "真正の科学" たる骨相学と遭遇することは，まだ十分にあり得ることだった。

例えば，王都にまた一つ新しい骨相学協会（The British Phrenological Society）が設立されたのは1886年のことで，

*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻教育コミュニケーションコース 准教授
令和4年4月20日受理

そこでは機関誌の発行も行われた[6]。関連書籍の出版も専門・通俗の別を問わず続いていた。専門書なら，ヴィクトリア時代の大ベストセラー，G・コーム（George Combe, 1788-1858）著『人間構成論（*The Constitution of Man*）』（初版1828）が改版増刷され，相変わらず売り上げを伸ばしていたし[7]，ウィーン大学卒の医学博士B・ホランダー（1864-1934）による1889年以降の一連の著作もあった[8]（帰国後の高橋も，ホランダーを通じて骨相学の最新成果をフォローし続けていたらしい[9]）。通俗書なら，例えば1889年刊行の「金持ちになる方法」という副題のついた『骨相学と職業選択』のリプリント版が，筆者の手許にある[10]。

ガル－シュプルツハイム説への反発から，殆どの研究者が大脳機能局在論に反対の立場をとった時期もあったが，P・ブローカ（1824-1890）やC・ウェルニッケ（1848-1905）らの医学上の発見も手伝って，脳神経科学における骨相学再評価の機運が，部分的にも高まっていた[11]。印象深い事例がある。英国では，ナポレオン戦争や都市化の進展によって急増したホームレス対策のために，1824年以来，浮浪者取締法（Vagrancy Act）が制定されていた[12]。その第４項は，例えば手相術（palmistry）のような「占い（to tell fortunes）」行為を禁じる内容だった。19世紀ロンドンの路地にはその類いの店を構える者が少なくなかったようで，風紀を紊乱するとの理由で警察が取り締っていた。ところが，警察がこの第４項を適用して“辻の骨相学者”を逮捕することがあっても，往々にして彼らは無罪放免になった。何故なら，判事が骨相学を脳科学と認定することのあったためという（それは20世紀に入ってさえ見られた）[13]。骨相学は，19世紀英国社会の中で確かに「科学」だったのである。

本稿では，生理心学と骨相学をPhrenologyを意味する語として用いてゆく。

２．高橋の生理心学レクチャー

高橋邦三は日本の教育者に向けて「生理心学」を発信した。その内容を，それぞれ特徴的な２誌８本の記事から確認してゆこう。

⑴『私立兵庫県教育会雑誌』

『私立兵庫県教育会雑誌』は，1889年９月に創刊された私立兵庫県教育会の機関誌である。私立兵庫県教育会は，同年８月に県下の師範学校長や県学務課の職員らが主体となって創立され，機関誌の発行のほか，教員講習会の開催，年１回の総集会と月１回の常集会における「教育ニ関スル講談，討論，演説」の企画等を行った。「私立」を名乗ったのは，数多既存の「天くだり的な官制教育会」と「区別する」ことが目的だった[14]。創立時の会員数は915名，「学校の教員はもちろん，およそ教育に関係ある官公吏・教育篤志家など，県内の有力者はほとんど会員として名を連ねていた」[15]。神戸商業学校の新任教師としての高橋の「生理心学」は，そのような大規模教育会の集会で講演され，活字化され，全兵庫県の“教育家”の前に提示された。

本節で検討するのは，常集会と総集会での講演を基に書かれた５本の記事である。機関誌に掲載された彼の論考は６本あったが[16]，その内の１本，「神経衰弱の手当法」が掲載された第128号はCiNii Booksの検索に引っかからず，国立国会図書館・兵庫県庁県政資料館・神戸市中央図書館及び文書館にも所蔵がなく，今回は発見・入手できなかった。なお，「脳の衛生〔2〕」について，著者名が「高橋邦之助」になっているのは「邦三」の誤植に相違ない。

①「生理心学一斑」（1898年11月20日，111号，「論説」1-8頁）

第１報は，「私立兵庫県教育会常集会席上に於て述べられたる演説の概要筆記」である[17]。内容は，骨相学の成立史と理論の概要からなる。高橋は「脳の模型」を携えて演壇に立ったが，そのような光景は西洋における講演においてもお馴染みのものだった[18]。冒頭，高橋は２つの野望のあることを述べ，講義を開始した。「人の心の作用を判断する」この学問を，「本邦の教育上に感化事業等に応用」すること，そして「大学の一科として医学，解剖生理学及び人類学と連合して研究」してもらうようにすることである。

この「生理学」を創始したのは，「墺太利皇帝陛下に侍医たりしドクトルゴール〔Franz Joseph Gall, 1758-1828. ガル〕」[19]。着想はその少年期の体験に遡る。ガルは，眼の突き出た友人が必ず言語的記憶力に秀でていたという“実体験”から，才能と外見の相関のアイデアに取り憑かれた。ガルは探究を進める中で，「識認観念記憶想像判断等」といった，従来の所謂“形式能力”論に飽き足らなくなり，「絵画音楽」等の個別的能力論を構想する。「維納瘋癲病院」――“愚者の塔（Narrenturum）”と呼ばれた当時最先端の精神病院――で患者の観察や死後解剖に参加し，頭蓋骨の形状の特徴が，脳の個性的な形に一致してできたものであることを「発見」。その後助手の「スパルツァイム〔Johann Gaspar Spurzheim, 1776-1832. シュプルツハイム〕」を得て共同研究をし，「多年の間に多くの事実を集め」，「「インダクション」即ち帰納法に依りて立派なる斯の生理的心理学の基礎」を確立した。

高橋が骨相学に出会った英国については，次のように語られた。宗教が盛んで骨相学への反対者も多く，「一時は余り注意する人がないやうに」なったが，「今日の科学進歩に連れて生理学も大に進み来り其成績と斯学の原理とを相対照するに益斯学の真理に適ひ居るを発見し近頃大に学者の注意を惹起」した。例えば，「言語の中枢は仏国のブロカ先生は病体解剖に依り左の前頭第三廻転の

後下部シルヴヰユス溝〔sulcus Sylvius〕に接近しレール島〔island of reil〕の上に当る部分にありと云い，それを「ブロカ廻転〔convolution of Broca〕」と命名した。尤もこれは，上記の通りガルが既に「発見」済みのものであったのだ。因みに，高橋の講演から見てガル学説は100年程前，ブローカの研究は約40年前に発表されたものである。

続けて高橋が脳の模型を用いて解説したのは，脳回と骨相学的器官（organ）の対応についてであった。当代の医学者「ドクトル，フェリール」，即ち哲学者A・ベイン（1818-1903）の下で心理学を学びエディンバラ大学で神経生理学を修めたD・フェリアー（1843-1928）の説を引きつつ，「前頭第一第二廻転の後半部を以て頭と眼との運動神経の中枢なりと為し此部刺撃の結果を記して「眼広く開き瞳孔も大に開き頭と眼とを左右に動かす云々」と云いました是は霊妙〔Wonder。骨相学的器官の一つ〕一名好奇心のある所でありまして猿の如きは好奇心の甚しきを以て総て珍しき物を見れば眼を白黒し頭を左右に動かします」。

最後に，骨相学の６原則が示される。第１則《脳は心の働きの機関なり》は，「皆さん御承知」の通り，「百般の行為思想感情等」の原因は脳である。「宗教的の思想」を退けて「実物世界」を論じるなら，それらは脳神経の機序に外ならない。例えば，「睡眠」は「脳中血液の減却するより来り熟睡中は心の働停止」であるし，「失神」は「脳中の血液急に（或は漫に）下却する」ことで起こる。「脳上に於ける病的外傷的或は人工的圧迫は知覚を奪」うが「圧迫去れば知覚する」。以上のように列挙され，事故や戦闘で頭部を損傷した水夫や兵士の実例が示される。

第２則《脳は一個の単一なる機関にあらず幾多の機関の集成物なり》は，脳の機能が形式的・抽象的なもので はなく，個別のものであることを論じる。「各種の心的機能は其発達を共に」しない。五感にしても識別反省にしても，ヒトは同時に何でも出来るようになるのではなく，発達や年齢に応じて各働きが順々発現してゆく。その理由は，各能力を司る器官が「単一」ではなく「幾多」もあることにある。「天才（ヂニユス）」が「通常一技一能に偏ずる」のも同じ理由からである。「言語の暗記力に強き人必ずしも算術の名人たらず」。異才は抽象的に万般に当てはまるものではなく，常に“ことば”や“計算”といった具体的対象をもつ。逆もまた然り，「偏痴偏狂」も例証である[20]。夢を見ることもそうだ。ある機能が働きを停めている一方で，ある機能は覚醒している状態が「夢見る事」なのだ。当然，「外傷等の為め脳の一部を害され其部に関する機能のみを失ひ他の機能は依然働きを為し居るの例」もあり，それらが全て「本則を確むるの証拠」となる。

残り４つの説明は簡略である。第３則《頭蓋骨の外形は脳の外形に略ほ等し故に活人に就て其頭蓋骨の形を見て其脳形を推察するに足る》は，骨相診断の肝心要なのだが，「近時の学者皆之を承認」していると述べられ，彼らの名が列挙されるに留まる[21]。第４則《他点に於て差異なくんば脳或は脳の各部の強弱は其発達の大小に比準すべし》は，「同質同構造のものは小より大強く大より小弱きは三才の小児も之を知りませう」とする。第６則《心的各機能は単独の働く事あり又結合して働くことあり》については，日常生活を通じて皆了解していることであるとされ，「見つゝ聞き思ひつゝ働く等皆其例」であるという。心理に影響を与え得るものの一つに「教育」を指摘した第５則《脳の原質，身体の資質，健康，教育及び外物の刺撃等は心の働きに小なからざる影響を及ぼすものなり》についても，「世人皆之を知つて居ります」として，「別に弁じませぬ」で片づけられた。

「集成物」である脳を構成する「幾多の機関」が司る40個（五官は含まれない）の「原能力」（図１），つまり

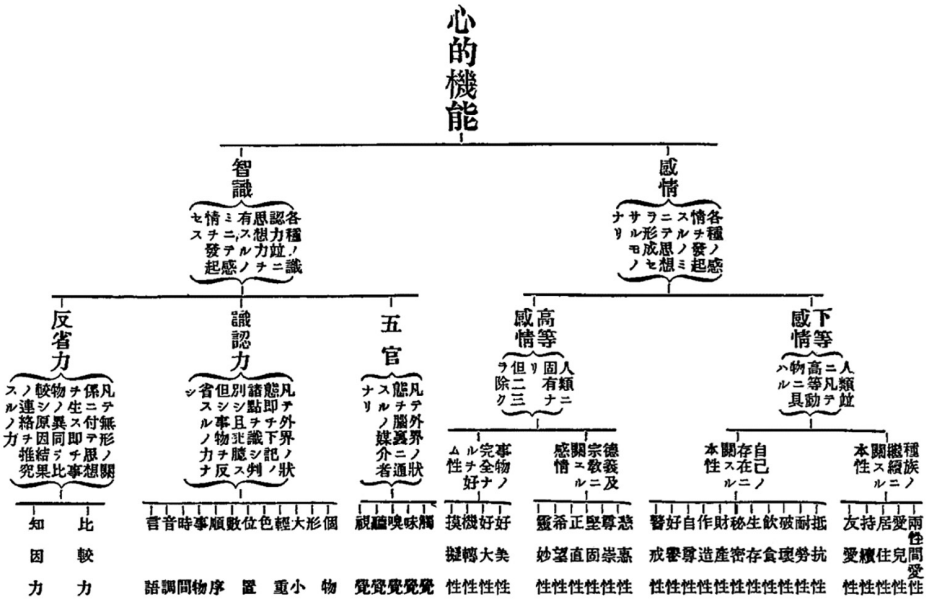

図１　心的諸機能生理心学的分類表
（『教育公報』235号より。１枚の図に筆者調整）

脳機能一つ一つについては本記事では省略され，「異論或は質議ある御方は御遠慮なく」と締められた。その後，講演で用いた脳模型が観覧に供され，高橋の呼びかけに応えた１名が骨相診断を受けた。

②「脳の衛生〔1〕」（1899年11月25日，123号，「学説」9-13頁）

第２報は，春に行われた総集会での講演概要である。内容から見て，この後の③～⑤と未入手のもう一本も，同講演の分載ではないかと考えられる。③以降の各記事に明記されないので正確なところは不明だが，テーマは一貫して「脳の衛生」である。因みに総集会には著名人が講師として招聘されており，伊沢修二（1891）や沢柳政太郎（1909），新渡戸稲造（1911）らが名を連ねた。高橋が演壇に立ったのが 1899 年とすると，同会では明治大正期の政界の大物だった床次竹二郎（1867-1935）が招かれていた[22]。

本記事では，最初に「脳の異状」は「小児に最も多し」と述べられる。「其異状は胃腸其他の感応より来るもの」が少なくない。従って，「之を痴呆として鞭打つ」のは間違いであり，「医療を加ふべき」である。「脳神経等を毀損せざらんと欲せば，先つ其実質，構造，作用等を了解」せねばならないため，一朝一夕にはいかない一大事だ。脳は，水75.5％，脂肪11.5％，タンパク質7％等から成る。ヒトの脳量は男性が48オンス（約1344g），女性が44オンス（1232g）である[23]。それらをゾウやクジラやカナリアなどと比較すると，「人類の脳質は，最も善良にして，構造は最も綿密なり。随て他動物に具備せざる作用を有する」。但し，ここでその詳細は語られない。

続いて，「大脳」「小脳」「延髄」「脊髄」「脊髄神経」「交感神経」について論述される。一見して晦渋な印象を与える記述から，以下に大脳の解説を例として引用する。

> 位置，脳髄の前上部に位し，其大部を占む。
>
> 形状，楕円，一の縦溝によりて左右の両半球に分かたれ，表面夥多の蜿曲せる皺裂ありて，著く凸凹をなせり。
>
> 作用，動物的，徳義宗教的，智識的（運動的）（知覚的）精神的現象の異なる所以は，全体の大小，各部の大小，に依るものにして，大脳表面の凸凹は，其皮質の面積を加ふ，即ち皮質の面積は精神力に関するものならん。
>
> 原質に於ける欠損，或は害毒は痴呆，愚鈍，無智，柔弱，意志，或は徳義欠乏の原因となる。大脳を離れて知覚なし，然ども，大脳を去るも運動は呈することあり。

脊髄神経（脳神経）の解説では，「第一嗅神経」「第二視神経」「第三動眼神経」…と12の神経が列挙され，その分布や機能が細かく述べられる。例えば，「第七顔面神経」ならば，「顔面の筋，眼囲輪走筋，後頭前額筋，外耳筋，鐙筋，口蓋挙筋，口蓋懸壅筋，茎状舌骨筋，二腹顎筋の後腹，頬筋皮下頸筋，舌下腺及び下顎下腺を主とる」といった調子である。現代医学の水準から見ても殆ど遜色ないこのような解説が4頁にわたって展開され，「以下次号」と結ばれる。

③「脳の衛生〔2〕」（1900年１月25日，125号，「学芸」15-16頁）

本報から，「神経衰弱」の議論が展開される。「神経系は一機械の如し」，また「働を持続せんには，日々時々力を之に供給せざるべからず」といった機械論的解説は，“技術屋”の端くれであった高橋の面目躍如の趣もある。前記事で「脳の異状」と「胃腸」等の関係に言及した通り，「神経衰弱」は全身の「体力の衰弱」の一つであり，「胃力衰弱」や「筋力衰弱」と並列されるものである。患者として挙げられたのは，「出産」「家事困難」「安眠不足」「営養不足」の母親，「交接過度」で身心を損じた「流行女」，「房事過度」の「不幸者」，「生命を厭ひ意思心力共に欠乏せる「ヒポコンドリヤック〔hypochondriac〕」」，「友人を憂へしむるの「メランコリヤ〔melancolia〕」」，「商業上過度の注意，心配，過労等より来る神経衰弱家」といった人々であった。

症状には次のようなものが挙げられた。「怒り易きこと」「他人の落度を見出すこと」「不礼を感じ易きこと」「泣き易きこと」「食物に付美味を八ヶ間敷云ふこと」「何事に就ても連続なる話の出来ざること（論理等に欠ぐること）」等々。これらは皆，遺伝・営養不足・過労・刺激性の飲食物・睡眠不足・瘰癧（結核性頸部リンパ節炎）等が原因で引き起こされた「病気」に拠る。加えて「暖室的教育（ホットハウスエジュケーション）」即ち早期英才教育や「坐業」，また「富貴を競ふこと」も神経衰弱を引き起こす。“疾患”であるそれらを，人はしばしば“道徳の問題”と見做して呵責する。だが真に必要なのは鞭打ちではなく，医薬や「養生法」だ。これは「教育家の注意すべきこと」である。

今般，神経衰弱の患者はますます増加傾向にある。神経衰弱の予防・治療方法の科学的研究が喫緊の課題である。高橋は，結びに教育者の注意を喚起した。「急忙，激昂の代りに静穏，平和に生活を送るの方法，を世人に知らしむるは夫れ誰が任ぞや」。

④「神経衰弱を治するの方法」（1900年３月25日，127号，「衛生」10-12頁）

神経衰弱の人に必要なのは「同情，憐憫を加へ懇切に」処遇することで，彼らの態度を「怠慢等の結果と見做すは大なる誤なり」。身体が頑健で神経だけ弱い人間は，自殺の危険性まであるのだ。

本記事で高橋は，第１報で解説した脳・脊髄神経（「動物性」）と交感神経（「植物性」）の２種の神経系の存在を

挙げ，特に後者に注目する。交感神経は，「脊髄の前方に位し，数多神経節の連鎖せるもの」で，そこから心臓，肝臓，胃，また血管に多数分布する。その作用は「意志に随はず故に，交感神経衰弱するも外部へ顕はれずして単に不快を感ずる」ことも少なくない。生理学者「ビシャット〔X・ビシャ，1771-1802〕」による「動物性生活〔vie animale〕」と「植物性生活〔vie organique〕」の区別で言えば，多く神経衰弱は「植物性（交感）生活に於ける欠損」が原因である。そして，そのような“交感神経衰弱”は治療可能である[24]。高橋がここで論じようとしたのは，つまり，自律神経系の支配する呼吸や消化，循環に関わる「衰弱」とその治療法なのだった。

神経系に傷害を与えるのは，一つは血液による間接的なもの，もう一つは直接的なものである。前者について，「神経の妙機」の詳細は不明だが，その強弱は「神経に供給する血液の滋養分に富むか富まざるか，将た純粋なるか否か」による。その際，アルコールやタバコ，茶やコーヒーといった嗜好品は，血液を介して神経系を傷つける。他にアヘン，ヒヨス（鎮痛や鎮痙に用いられる植物），苦味草（ビールにも入っているホップ），「不良空気」なども衰弱を招く。

後者の直接神経系に傷害を与えるものには，「憂慮」「苦悩」「安眠不足」「過度の暑寒」「過度の仕事」「身体の疲労」，そして「過度に脳力を用ゆること」が挙げられる[25]。その徴候は，「イライラ」や「驚き易く，心臓作用の不規則なるを訴へ」ること，「決断，勇気共に減却」「記憶力〔の〕衰」，「疲労し易く」「混乱し易」いこと等である。

「時々鬱憂の発作」があり，「終始不幸を感ずる」。生活に楽しみがなく，食欲もなくなり，悪寒，頭痛，腹部の不調和をきたす。だが「一時の興奮を得んと欲して「アルコール」を使用するは過ちの最大，不幸の極」である。「気管支炎」「肺患」「ブライト病〔腎炎〕」「脳病」「狂気」などがあれば，それは神経衰弱症が「足許迄来り居る」証拠なので要心せねばならない。

⑤「脳の衛生〔3〕」（1900年６月25日，130号，「学説」9-11頁）

“神経衰弱の治療法”の具体については，記事④の最後で「次号に掲げん」とあるのだが，残念ながら当該号を入手できなかった。だが，１号飛んだ本記事のテーマもまた，神経衰弱に対する養生法である。前号からの議論の続きであろう。

高橋は最初に，海外の学説から「小児肉食の害」を紹介する[26]。神経組織に必要なのは，むしろ炭素・水素・酸素からなる「含水炭素」，即ち砂糖，デンプン，油などであり，それらは筋組織にも不可欠な要素である。さらに，「神経並びに筋の働作に必要なる神経，並びに筋に於ける電気力を維持するのにも必要」である。歩くのは良いと言われるが，「多少の脳力を保たしめんためには歩行の如きも倹約」が必要である。なぜなら，神経の弱い人は，長く歩くと失神したり呼吸停止に陥ってしまうこともあるからである。また，神経病には営養を十分に与えなくてはならない。「ヒポコンドリヤ」や「ヘステリヤ」にも食餌療法がよい。但し，アルコールは「良結果を来たさずと知れ」。

健全な体質を遺伝する者は多くはないからこそ，ここに挙げた衛生法を活用すべし。そのように述べられ，連載記事は完結する。

⑵『教育公報』

『教育公報』は，1896年11月に『大日本教育会雑誌』から改称された，帝国教育会（旧大日本教育会）の機関誌である。帝国教育会は，機関誌発行のほか，学制調査や国字改良研究，講演会の開催，図書の出版，研究サロン「教育倶楽部」の主催等を行った。発足の契機は，日清戦争による「国民的自覚」の深化と「思想生活」の「活気と動揺」であるとされ，それ故に焦点化されたのは，「汎ク海外教育ノ実況ヲ網羅」することであった[27]。高橋の骨相学記事が掲載された背景には，この国際動向への関心の高まりも在ったものと考えられる。

ここで取り上げる「脳皮質局部作用」３本は，一本の論文の分載である[28]。内容は『私立兵庫県教育会雑誌』の場合とは異なり，より骨相学の一般的イメージに近い議論となっている。以下，前記と重複する部分もあるが，教師を辞めて東京に戻り，1903年に「東京心性学館主」となった“プロの骨相学者”高橋の解説を，改めて追ってみる。

①「脳皮質局部作用」（1907年１月15日，315号，「論説」4-8頁）

「脳皮質局部作用」とは，「脳の表面を形成する灰白質部は其の部域々々に依り夫々特殊の心性機能を司り其の部域々々は無数の神経繊維にて互いに連絡し諸種複雑の結合作用を営むものなりとの学説」の謂いであり，つまり骨相学理論を指す。「フランシス，ジョセフ，ゴール」は，しばしば誤解されているように最初に脳解剖に従事したのではなく，「専ら自然の観察」を行った。その学問的性格は「帰納的推究」である。ガルはそれにより，「特殊の心性能力は特殊の頭形に伴ふ」ことを知り，而してヒトと動物の脳解剖に取り組んだ。その結果，「頭蓋を除去し硬膜を存せる脳の形状は必ず生前に於ける頭蓋の形状に準応する」ことを見出し，精神病患者などの観察を重ねて「脳髄生理」を探究した。

教育との関係については，助手のシュプルツハイムにより際立つ形で結び付けられ，推進された。シュプルツハイムは新たに「心性学（フレノロジー）」を名乗り，「知徳教育上に適用の途」を開いた。現代も脳機能局在論の源流の一つに数えられるその「脳皮質局部作用」論の解説は，次の通り始まる。

一種の心性作用が脳の一部局と不易の関係を有する場合に該作用を機能と名け該局部を該機能の中枢或は機関と称す而して機能なる語は知的作用と情的作用とを問はず共に之を適用するものとす。一機能にして其強弱（他点に差異なき場合に）脳の一部局の発達大小に準応するとき之を原始的機能と称す

前掲図１で示した個々の「機能〔functions。又は faculties 能力〕」を司る「脳の一部局」或いは「中枢」「機関〔organ 器官〕」は，発達差によって大きさに違いが生まれる。それら「原始的機能〔又は primitive faculties 基本能力〕」は単独で働くばかりでなく，「其目的物の撰択等は他機能の結合を俟て行はるる」。例えば，仮に《愛児性（Philoprogenitiveness）》の器官が大きくて，《好美性（Ideality）》も発達している人なら，ただ闇雲に子供を愛するのではなく容貌の美しい子を愛し，醜いとそれ程でもない。《好誉性（Approbativeness）》も他機能と結合して発現する。「財欲深き人は蓄財を以て誉とし学者は博識を以て誉れとし力士は力量を以て誉れとする」等――ここに認められるのは一種の職業観，新時代の科学的能力主義的なそれと言える。

②「脳皮質局部作用（承前）」（1907年２月15日，316号，「論説」18-22頁）

本報は，先に検討した「生理心学一斑」（1898）の内容・構成をベースに，新情報を追加し表現を推敲して書き下ろされたもののようである。

医学者・長谷川泰（1842-1912）は Phrenology を「骨相学」と訳したが，その語感は「穏当を欠き甚だ誤解を招き易」いため，「生理的心性学」と訳し直すべきである[29]。「頭脳を主とし身体の発達状態と心性作用との関係を論ずるもの」（傍点ママ）がフレノロジーだからだ。それに依拠すれば，「教育医術其他人材の登用配偶の撰択等を行ふに至らば其の社会を裨益する実に多大なるべきを信」じる。ここで，かつて６つで示された骨相学の原則が，新たに８つに整理されて提示される。

一，人類の心性は先天的に属するものなり。
二，凡そ，心性作用は脳に依り営まるゝものなり。
三，脳は単一機関にあらずして各種心性機能中枢の集合するものなり。
四，脳蓋は脳と共に消長し其の外形は脳の外形に準応するものなるを以て頭の外形を観て脳の形状大小を推知し得べし。
五，心性機能の強弱は他の諸点に於て差異なきときは其の中枢即ち機関の大小に準応するものなり。
六，心性機能の鋭鈍は脳組織の精粗，身体の資質，教育練習の程度，諸機能相互の関係外界の状態等より来るものなり。
七，心性機能の動止作用は単独的なることあり又連合的なることあるものなり。
八，凡そ心性機能の中枢は其の働き旺盛なるときは各特殊の顔容姿勢或は動作を身体に与ふるものなり。

「生理心学一斑」にはなかった論証の一例に，前頭骨にある「前頭竇部〔frontal sinus 前頭洞〕」への言及がある。これは西洋のアンチ骨相学者が必ず攻める“急所”の一つで，頭蓋の外形が脳外形に対応するという骨相学の理論に対して，空洞である前頭洞の表面の外形には脳形状は影響を及ぼさない，という批判である[30]。高橋もこの典型的批判を取り上げ，また定型通りに反駁した。「其の位置厚薄の差異は健康体に在りて略ぼ一定し居るもの」なので，注意して観察すれば問題ないのだと。

高橋は「教育」可能性にも論及し，教育や健康法の効能を謳った。「心性機能の強弱」は「当該機関の大小に依るは固よりなるも其の働きの鋭鈍は脳組織の精粗，身体の資質健康の良否教育練習の程度」や「外界の状態」などで変わってくる。また，「元来脳の組織身体の資質等は遺伝に係り生後之を如何ともすべからざるものゝ如きも養育衛生等により或程度まで改良を加ふること強ち不可能にあらず」。残念ながら，またしてもその後の詳しい論説は展開されず，「教育練習等の心性機能に及ぼす影響如何は普く世人の知る所なるを以て更めて之を説くの要なし」と済まされる。

他には，前出のフェリアーや，Ch・ベル（1774-1842），F・マジャンディ（1738-1855），ブローカら生理・解剖学者の説が引かれ，ガルの正統性が主張される。「よぢのぼる麓の路は多けれど同じ高根の月を見るかな」という一休宗純の格言で締め括られた。

③「脳皮質局部作用（承前）」（1907年３月15日，317号，「論説」17-21頁）

骨相学を知るには理論だけでなく，構造を知るための実地の脳解剖が必須である，と高橋は主張した。「局部作用の未た医界に普知せられさる」現状にあって，「心性作用の頭脳に基くものたるを知る以上は開検に際し如何なる種類の精神病に伴ひ脳の如何なる部分に如何なる異状を来し居るか又如何なる性能の長短に対し脳の如何なる部分に発達の大小あるか等に注目」すべきである。西洋では，著名人が死亡した際にその脳を解剖したり模型を作成したりすることが，一種の「礼」となっている。中江兆民（1847-1901）が死後の脳解剖を実施しながらも骨相学的観察を受けなかったこと[31]，近年物故した勝海舟（1832-1899）や陸奥宗光（1844-1897），市川團洲（1838-1903）らの「頭脳」が「空しく荼毘に附し去」ら

れたのは，大いに悔やむべきことだ。

次いで“骨相マップ”が掲載され，各「本性」の説明とその器官が発達した著名人の名が列挙される。以下では，前掲図１に示された「心的機能」の分類に則り，「下等感情〔Propensities〕」「高等感情〔Sentiments〕」「識認力〔Perceptive Faculties〕「反省力〔Reflective Faculties〕」からそれぞれ一つずつ引用しておく（〔 〕内の人名は筆者の推測を含む）。

> 友愛的本性〔4〕，人に頼み友を愛するの性なり又慣用せる物を愛して之に離るゝを厭ふの傾向あり中枢は後頭葉に在りて居住中枢の両側に位す此部及居住愛児等諸中枢過度なるときは愛郷病（ホームシツク）を発するに至る大隈〔重信〕伯故黒田〔清隆〕伯後藤〔新平〕伯福澤〔諭吉〕翁等に於て此中枢大なり。
>
> 好美的本性〔19〕，美を好むの性にして詩的感情の大原素なり又他機能を誘発して事物の改善を計るに至る中枢は第二前頭廻転の最上部外半を占め霊妙中枢の外側に位す春畝侯〔伊藤博文〕早稲田伯〔大隈重信〕〔下田〕歌子女史鶴彦翁〔大倉喜八郎〕愕堂〔尾崎行雄〕等諸氏に於て大にしてアイヌ南洋人等に於て小也。
>
> 数量知性〔28〕，他の数を認識記臆するの性なり中枢は第三前頭廻転の下に在りて順序中枢の外側に方る大隈伯肝付〔兼行〕少将鶴彦翁等に於て大なり。
>
> 推因知性〔35〕，事物の原因結果の関係を認識記臆するの性にして中枢は第一前頭廻転の中央側外に在り即ち比較中枢の外側に位し前頭突起部に方る比較と相待て推理反省作用を呈す菊地〔菊池大麓理学博士〕，井上〔哲次郎文学博士〕，富井〔政章法学博士〕，北里〔柴三郎医学博士〕，青山〔胤通医学博士〕，三浦〔謹之助医学博士〕，呉〔秀三医学博士〕，下瀬〔雅允工学博士〕，真野〔文二工学博士〕其他諸博士に於て本中枢比較中枢共に大なり各推理に妙なるを以て知るべし。

論考の最後は次のように結ばれる。「ゴールが不世出の才は能く造化の秘曲を発きたるものと謂ふべきなり。（未完）」。

３．生理心学の教育論

⑴　明治後半期の教育と骨相学の関係

専門的な医学用語が次々と繰り出される高橋の講演に，聴衆の教育関係者たちは畏れ入ったことだろう。特に兵庫県教育会では，元大倉組英国支店長の肩書きも威風を放ち，“相当の人物”が来臨したと思われたのではないだろうか。

では，結局の所いかなる「教育」がそこでは語られたのか。いずれの論考にも，教育に関わる具体的な「方法」は殆ど語られていない。「教育練習」が「心性機能」の発揮に効果があることは再三認められるものの，“論じるまでもない自明のこと”とて詳らかにはされない。実際，当時の教育家は高橋の言説の如何なる内容を以て，骨相学を教育にとっての“有用な科学”として受容する可能性があったのだろうか。

一つの手掛りを示そう。独米留学から帰国したばかりの槇山栄次（1867-1933）の証言である。槇山は，1908年夏に開かれた大日本教育団主催の講習会に登壇し，「欧米教育界に於ける理論上及実際上の新傾向中，小学校の実務に直接の関係ありと思惟したる事項」を語る段で，骨相学と高橋に言及した[32]。今般の「新しい教育学」の成立が心理学の進展に拠ることを述べた槇山は，最新の心理学の特徴を「生理学」との結びつきにあるとし，骨相学にもその一つとなる可能性があることを述べた。「京都の商業学校長をして居つた高橋邦蔵（ママ）君などは非常に骨相学に熱心であつた」。世間は「何だか不思議なことをやるもの」と訝しむ向きがあった。だが「西洋では近頃になつて心理学の研究年々進歩して参り此の種類の研究は次第に重きを置かるゝやうになつて」きたと。

「不思議」や「非科学的」と見做されがちだったが，むしろ「新潮」の可能性あり。そう評価された骨相学は，槇山によって脳神経生理学の教育への応用を主張する体系の一つに数えられた。日本の教育家たちの小さくない関心と期待が骨相学に寄せられた一時期のあったことは，拙稿でも論じた[33]。世紀転換期，戦後に通じる近代日本の学校制度の“整備”が進み，一応の完成を見る頃の事である。それがまた新教育運動の揺籃期でもあったように，当時の教育家たちの内には，“新しい教育”を期待する気持ちの確かに燻っていたことだろう。文字通りの「生理的心理学」の教育への導入は，斯界が骨相学へ寄せた期待の一つだったと考えられる。

⑵　養生／衛生論

生理学的な心理学は，近代日本の教育に如何なるかたちで資し得たか。本稿では，２つの視点から検討する。第１のフィールドは「衛生」，第２は「進路指導」である。

“生ヲ養ヒ，衛ル”

「衛生」の語は，“健康を守ること”を意味する独語ゲズントハイツプレーゲ（Gesundheitspflege）やヒギエーネ（Hygiene），また英語サニタリー（sanitary）やヘルス（health）をカバーする翻訳語として導入された。西洋近代の実験的方法に基づく健康形成概念で，しばしば江戸時代の「養生」概念と対比される。1875年に内務省に新

設された部局が「衛生局」と命名されて以降，語の一般的使用が社会に拡がり，やがて「衛生」と名が付けば商品が売れるといった“流行語”の一種にまでなった[34]。富国強兵政策の一端は,「民族衛生学（racial hygiene）」として興隆してゆくことにもなる。

勿論,「養生」という言葉が一般に用いられなくなったというのではない。江戸時代に数多編まれた養生書は，社会医療制度が“未整備”だった時代に引き続き“家庭の医学”（昨今言うところのセルフメディケーション）の務を果たした。それは明治以降にも引き継がれ,「養生」を名乗る書籍の出版は続いたし，またそのような伝統が科学的「衛生」移入の下地を形成した[35]。

高橋が論じた「脳の衛生」は，要するに，時流に符合したテーマだった。瀧澤利行の調査によると，明治期の「養生」の書（近代養生論）では，しばしば「精神・脳および神経の機能」が取り上げられていた[36]。かてて加えて，江戸期の養生書の出版が殆ど都市部でなされていたとの指摘も,骨相学の文化史を考察する上で興味深い。後述するように，骨相学（現象）は，きわめて近代都市的な“時代の産物”と見ることもできるからである。

神経衰弱

高橋の論考の社会的背景として,「衛生」に合流したもう一つの時代的流行が「神経」と「脳」，そしてその「衰弱」だった。先ず「脳」については，西洋的な脳イメージの導入が日本人に「感覚・知覚－心身の機制の変容」体験をもたらした,とする川村邦光の分析が参考になる。「人の魂というものは，頭脳にあるという説が面白い説で，古来胸にあるものとおもうて」いたが，説かれてみると「いかさまそうかとおもわれる」という，1874年出版の『文明開化』（加藤祐一，上巻，15丁ウ）からの引用は，そのような事態をよく証言している[37]。

「脳」は日本人の病因観にも根本的影響を与えた。直接的例の一つが「脳病」の登場である。1880年代半ば以降，専門的にも「精神病」が「脳病」と呼称されるようになり,「癲狂」「瘋癲」を扱う病院は「脳病院」に改称されていった[38]。他方では――上記養生／衛生の１ケースであろう――「脳病薬」とその広告が市井に大量に出回る事態が出来した。注目すべきは，そこに謳われたその薬効がさながら“万能薬”然としていた点である。川村はこの点を考察し,「脳病」が脳髄や神経の機能的・器質的な障害であることを当時の民衆たちが理解していなかった事実を表すもの，と解釈した（それを鑑みれば，1899年時点で，骨相学を介することによってある面“正確に”神経系の病として「神経病」を論じた高橋の開明性も仄見えてくるのかも知れない)。

そうして，明治後半の日本社会に蔓延したのが「神経病」や「神経衰弱」だった。「脳病」とも重なるこれらについては，度会好一の研究から整理しよう。世紀転換の頃より激化する受験競争と結びつけてそれを“受験生病”と整理する先行研究もあったが[39]，それでは不十分だ。東京脳病院や新潟病院の患者数の統計からは，受験期の10代よりも 30代，更に30代よりも20代の患者が多かったことが分かる。「学生」や「頭脳労働者」にのみ顕著というのでもなく，患者は「農業」「商業」従事者にも多かった[40]。

この時期に神経衰弱が増加した理由には，むしろ次のような３点が考えられる。①それが「文明病」であるため「なにがなんでも神経衰弱になって文明人の勲章にしようとした」者がいたこと，②自己診断できる病気だったので“手軽に”神経衰弱になった者のあったこと，③「欠勤や辞職に必要な診断書に格好の診断名として，重宝された」ことである[41]。当時殆ど流行現象の様相を呈した「神経衰弱」の正体は,「明治人の感じていた主観的な疲労感」の表象ではなかったか。それは日露戦争にて頂点を迎えてゆくものであった，と度会は考察した。

養生としての教育論

江戸時代の養生書の殆どは「近世の四大都市」である江戸・京都・大坂・名古屋を中心に刊行された[42]。しばしば引かれる柳田国男（1875-1962）の,「突如外部〔西洋〕から入って来た……今まで耳にもしなかった色々の物々しい病名の為に，急に人間が病に弱く」なったという証言にいわれた当時の状況を勘案すれば，文物の流入著しい都市部におけるセルフメディケーションとしての養生（書）の必要は，明治期においてますます高まったことだろう（無論，リテラシーや読書文化，病気観などとの複合的産物として)[43]。価値や制度の急流転に呑まれながら生きた人々――“旧時代を生きた大人たち”から“維新を知らない子供たち”まで――は，皆それぞれに「脳」や「神経」を「衰弱」させた[44]。高橋によると,「神経衰弱」或いは「脳の異状」は，しばしば胃腸などとの関連で生じる。それは交感神経の不調によって引き起こされる場合があり，治療可能なのだ，と。現代なら“自律神経失調症”とされる様態を，やはり医療の対象としてケアしていく行為それ自体と，それに関わる啓蒙が，いわば高橋の論じた「教育」だったのだろう。

個人部面における“神経衰弱の蔓延”に対して，衛生の社会部面では，明治最初の30年間で検疫や公衆衛生の法制度が進み，上水道も整備されていき，その結果，1890年代には人口増加率が恒常的に１％を超えるようにはなった[45]。とはいえ，それがまだまだ整備の途上にあったことは言を俟たない。そもそも骨相学は，西洋において「衛生」が社会問題として浮き彫りとなった時代に登場してきた。従って，それが講じた「教育」もまた，一例シュプルツハイム『教育（*Education*)』（初1821）の頁を繰ってみても分かる通り，食事（food）や運動（exercise)，換気（ventilation）等をその欠かざる一要素と

した，知徳体の総合的な環境論ないし養育論の様相を呈する[46]。『私立兵庫県教育会雑誌』に掲載された高橋の論考は，まさにこの養生／衛生に焦点化された「教育」言説として受容され得たと考えられる。

⑶ 進路指導

第２のフィールドである「進路指導」は，個々人のキャリアに選択肢が生じ拡大した社会においてより大きな意味を帯びる。身分制の解体と都市化の進展，「能力」用語の風靡がそのことと因果の関係を結び合う。

都市における異邦人性

「都市」の定義は多様ゆえ，細かい議論は先行研究に任せるが，明治期日本の近代化が“都市化”の側面を有していた点に異論はあるまい。特に，高橋が生理心学を発信した世紀転換期には人口増加が進み，交通発達と工業化が加速し，「1950年代以降の都市化の速度に匹敵するほどの高速度の都市化」が進行した[47]。1897年以降の東京・大阪の人口増加には顕著なものがあったが，一方で低率ながら地方都市の人口も93年以降着実に増加していた。人口史の鬼頭宏は，「いわば全国的に都市化が開始された」という言葉でこの状況を説明している[48]。“都市の学”は，それゆえに決して首都に限局されたものではなく，当時の日本においてさえ既に広範の地域に意味を有し得る問題系になりつつあった。

都市には，互いに見知らぬ他者が溢れる。人を判断するための手掛りである名前，出身地，仕事，階層・階級，ルーツ，その他様々な伝統的“属性”を「都市」はほどいてしまうからだ。先行研究でしばしば指摘されてきたように，“どこの馬の骨（étranger）”たちが輻輳するそのような空間に，安全地帯から他者を“見定める”科学的方法論としての骨相学（それを含めた観相学）が希求された[49]。G・ジンメル（1858–1918）は，“目で見て解釈し，耳で訊いて確認する（解釈を答え合わせする）”人間認識の仕方の前者のみが，19世紀の都市において突出していった事態を鋭く指摘する[50]。科学的に適確に“見定める人（detective）”たるシャーロック・ホームズがヒーローとして登場もすれば[51]，苦沙弥先生らを整然と観察する「観相学者」の猫が評判を呼んだ時世のことである[52]。坪内逍遙（1859–1935）が，人物描写を鍛えるために「骨相学」を勉強せよ，という近代小説の「神髄」を語った時代背景もここに重なる[53]。

明治社会メリトクラシー

さて，よく明治の世にメリトクラシー（meritocracy）の芽が吹いたと聞く。その人間が何者であるかを知るのに，伝統的属性には依らずに，働きの成果や達成業績に依るべきとする，機能主義的な人間定位の仕方に基づいた経済社会の出現である。

決定的契機は，明治維新による身分制の解体である。武士の視点から見れば，それは「没落」であり「失職」であった。慣れぬ商売に手を出し零落する悲惨状況（士族の商法）が各所で現出し，困窮の果てに「物を売るようにわが娘を売った」者も少なくなかったという[54]。園田英弘は一連の事態を，「武士による武士身分の否定という歴史的パラドックス」によって「武士」なる観念に未分化に融合していた「身分」と「職分」が分離され，そこに誰でも「能力さえあれば武士の「職」の担当者になりうるという意味での平等」を実質的に意味した「四民平等」の原則が浮かび上がった，と分析した[55]。「個人の機能重視」を徹底追及して生まれた「機能的平等主義」，即ちメリトクラシーの登場である。メリトクラシーの浸透した社会に住まう／それを構成する人々は，社会的成功を各人の能力の賜と疑わず，失敗を“自己責任”であると諦観し納得する[56]。

そのようなメンタリティーは，「通俗道徳」論を用いて松沢裕作が浮き彫りにした，「生きづらい明治社会」にも類比的に認められる[57]。そこでは，貧困や病気は当人の努力や道徳的行いの乏しかった報いであると見なすことが，当人を含めた人々の“ごく普通の思考”としてあった。江戸時代後半以降の庶民が有していた，「勤勉に働くこと，倹約すること，親孝行すること」等のごく普通の「良いおこない」と，良い結果を，さしたる理由もなく因果の軛でつないだ信念，即ち生活道徳としての「通俗道徳」の存在に起因するという。それは，文明開化の大きな個々人的モチベーションであった「セルフ・ヘルプ」の裏返しでもあったし，来たる新時代のメリトクラシーとも親和性が高かったことだろう。

教育が骨相学と結びつく要がそこに画然と浮かび上がる。あなたは，或いは彼／彼女は何者なのか。そこには当然，私は何者なのか，という問いも生起している。そして，もしその者が“青少年”であるならば特に，それはこれから何者になる人間なのか，と。

能力人間学

明治の史料にも，“自己を知る”術・知としての骨相学言説が多く見つかる。「汝自身を知れ（Know Thyself）」という文言が骨相学書で引かれる時，その意味する所は，自分自身の「諸能力（faculties）」の程度・特徴・構成を骨相学の教える所に従い科学的に把握せよ，ということである。

かつて筆者は，骨相学の歴史的意義を西洋教育史において再定位するために，「能力人間学」という概念或いは見方を導入した[58]。それは，人間を分析可能な「諸能力」の総合体として認識しようとする体系を指す。今少し詳言すれば，あらゆる知性や感情等の働きの要因を35個前後の「心の能力」に還元して，それらを生理的に司る脳各部位の発達差と組み合わせの次元で“個性”を把捉・説明可能にする，語彙（vocabulary または terminology）

を備えた理論体系の謂いである。“能力の束”である人間（“私”でも“他者”でも）を分析し，測定し，個性を客観的に把握／自覚した上で，その進むべき道を決したり，改良を働きかけたりする――そのような，教育史における骨相学の歴史的役割や人々がそれに寄せた心性や期待は，前述のような“自己認識”を求め始めた近代日本においても観察できそうである。

たとえ建前であっても，身分制が解体された社会では，何かをし続け，応え続ける以外にアイデンティティを支えるものはない。極端に言えばそのような状況下で，骨相学が人々に提供し得たのが，一人一人の才能や適性に関する比較的安定した“診断書”であった。高橋の論考「脳皮質局部作用論」では，第１・２報でその体系が経験主義的科学であることが論じられ，第３報で骨相学の各能力の解説とそれらを性格・才能の特徴とする著名人の名が列挙された。それは“適材適所”についての，形を変えた一種楽天的な議論と言えよう。東京心性学館での彼が，新時代の「女子」を対象に職業相談をその職務としていたことも思い出されたい（前稿）。職業（vocation）は，いまや前時代とは異なる形での“天職”の如く表象され，社会的成功は骨相学の読解する彼らの“本性”（能力人間）に一致するのだろう。

シュプルツハイムらの論じた骨相学の教育論は，能力の訓練論でもあった[59]。それは，“個人的・社会的衛生”によって身心（脳）を健全に発達させ，能力（脳機能）を正しく発現させることを可能にする内的・外的環境の構築・調整，また“才能”と呼ぶべき特長的能力の反復使用による育成，そして“科学的適職”への進路指導などから成った。殊にその威力が遺憾なく発揮される場を想定するなら，それは近代都市だ。使役する側の視点や俯瞰的視点からの“適材適所”も，個人的なキャリア形成と競争から見る“能力主義”も，その孰れの面もが“都市の学”としての骨相学と相性がよかったのである。

極端に単純化すれば，属性も特性も分からない子供たちを集めてどこ／いつ／誰にでも通用する（＝普通）教育を施すのが，近代学校教育の使命である。必然，教師は「教育」のために骨相学的な科学（能力人間学）を求めるだろうし，生徒たる個人は進路決定のために同様にそれを求める。『教育公報』誌上での議論は，各性質を有する人たちへのロールモデルを示す“人生カタログ”の役を果たしたかも知れない。高橋の生理心学における“教育論”は，そのような心性の人々に読まれ得る教育論だったのではないだろうか。

４．高橋邦三にとっての生理心学

では，高橋邦三というその時代の或る個人にとって，骨相学とは何であったのか。本研究がその読み解きの鍵とするのは，彼の年少期における歴史的奔流とその教育遍歴である。

士族ということ

第１の視点は「士族」である。現代で言えば就学前後の頃，明治維新を数えの８歳（満６歳）で体験した高橋は，それまでは「武士」であった。動乱がなければ，きっと将来もそうだった。そのことが高橋という人間にとって持った意味を小さく見積もる必要はないだろう。身心の在り方に及ぼしたであろう影響は言うに及ばず，“三つ子の魂が百まで”であった可能性も低くない。先行する教育史学その他の諸研究もこの点を重視してきた。

例えば，高橋と同い年の森鴎外（1862年生まれ）と，殆ど明治の生まれと言ってよい夏目漱石（1867年生まれ）の外国語学習を比較して論じた，杉本つとむの論考に学ぼう[60]。鴎外の外国語学習が江戸時代からの延長にあった「洋学」の性格を有したのに際し，漱石のそれは「明治の外国語学習」であり「英文学」だった。杉本は，その差をそれぞれの学習のスタートにあると見た。鴎外は，数えの６歳で『論語』を学び，８歳で藩校の養老館に通って漢籍を学んだ。その上で洋学の学習を開始する。つまり「洋学に就く前に漢文の基礎はほぼ確立」していた。これは「当時の士の子弟のごくふつうの学習コースであり，まったく江戸時代の洋学者の学習過程」であったという。つまり，新潟学校に入学した頃の高橋にも，そのような意味での「基礎」が出来上がっていたとしても不思議はない。

意識の上での「士族」はどうであったか。「士族」に対する意識の高さを際立って示した象徴的言説の好例と言えば，かの福澤諭吉の吹聴した“士族の優生学”を措いて他にあるまい。「天は人の上に人を作らず…」の言葉で知られる福澤は，他方では，F・ゴールトン（1822-1911）の優生学の論を参照しながら，「人ノ能力ハ天賦ニ存スル」として「士族ノ血統」の優位性を高唱した[61]。武士の矜持から新政府の官職に就かず，それでいて開化期の教育行政に絶大な影響力を有して「三田の文部省」と称された福澤は，「唯今後我国民ノ教育上ニ就キ能力ノ発達ヲ目的トシテ必スシモ此士族ノ血統ヲ保存セント欲スルノミ」と述べ，「能力ノ発達」が教育に依るとするのは単なる方便に過ぎない，とまで言明したのだった。

武士／士族という意識，更には明治期における立場が，教育面においても決定的な意味を持ち得たことは，度々指摘されてきた。明治初期以降の「士族」意識と学歴の関係を調査した広田照幸によると，インタビュー相手として「父親世代」と呼ばれた，恐らく高橋と同世代の彼らは，士族意識を内面化し強く意識していた[62]。維新後生まれの子供たちは，教育面において「父親世代」から士族を理由とする鼓舞を受けたという。制度的にも「士族」は1914年まで戸籍に明記された。「族籍意識は明治以後相当長い間存続した」との推論を，竹内洋も支持し

ている[63]。

当時の士族は,経済的困窮と文化的親和性の２因から,近代学校の最初の利用者となった。つまり,秩禄処分後の生計維持のみならず,嘗ての高い社会的身分を獲得する道として「学校」が魅力的選択肢であったという点と,文武の研鑽を旨とし教育を重視してきた「士族の文化資本」,平民には持ち得なかった「学校の文化に適合的な身体」を継承してきたという点からである。例えば竹内は,雑誌メディアを素材に検討し,1877年創刊の投稿週刊誌『穎才新誌』に投稿された「勉強言説」と士族の関係について明らかにした[64]。投稿者の中心は士族であり,投稿に表れた官職願望とその帰結たる富貴願望が「潜在化されていた武士的野心の顕現であった」という。

他方,逆の視点からこれらを眺めるなら,それは新政府による統治政策の一であったと見ることもできる。次世代たる貧窮士族の子弟をすくい上げる官費学校（師範学校,外国語学校,工部大学校など）の設置は,反対派の新政府への矛先を矯める役をも果たしたことだろう[65]。実質的には,「官軍」側だけで新政府の人材を揃えることが不可能だったというのが“真実”なのだろうが,いずれにせよ新時代のライフコースはうまく回り,時を経て定着し今日に至る（西南戦争後に多くの官費学校が畳まれ,当初の服務義務規定が緩和されていったことは,高橋の学校歴を辿る前稿で述べた通りである）。

次世代への教育熱は,救済策が殆ど講じられなかった失職世代にも小さくなかった。維新後すぐに各地に設置された育英団体の多くが,「士族救済」を目的としていたことが,具体的例証の一つである[66]。小林雄七郎（1846-1891）らが1875年に創設した,近代日本初とも言われる育英団体「長岡社」にしても,創立当初に限っては士族子弟の援助から活動を開始したらしい[67]。明治前半の「上京遊学」を量的に調査し,実際に「士族の子弟が極めて多」かったことを明らかにした吉田昇も,そうした育英団体の果たした役割に触れる[68]。次男三男だけでなく,高橋のような長男も多く含まれていた上京遊学者たちにとって,当時の東京は必ずしも暮らしづらい場所ではなかったという。書生やアルバイト,そして「給費制度」と育英制度により生活が確保できたからである。

佐幕ということ

第２の視点は「佐幕」である。長岡は,積極的な佐幕派であったわけではないが,官軍に反旗を翻した「賊藩」ではあった。高橋が工業や商業系の人材として社会に立身する路を歩んだことの背景には,少なからずそれらの要因があったのではないかと考えられるのである。

「佐幕」「朝敵」「賊軍」の体験（ときに烙印（brand））が,明治文化形成を担った人々に及ぼした影響の甚大さについては,既に木村毅が文学の領域において明らかにしている[69]。「明治文学」と称し得る作品の数々は,「みんな幕府方の産物」であり,「薩長土肥およびそれに阿附してうまくバスに乗りこんだような諸藩からは,作家は一人も出ていない」という。その例証は説得力十分である。一方で,木村自身も認める通り,他分野においてはそれほど瞭然とした腑分けは成立しそうにないのだが,それでもなお,「賊軍」の人たちの人生におけるあらゆる局面において,その影響の何らかが明に暗に及んでいたことは想像に難くない。

因みに,士族が明治初期の学校教育の主たる享受者であったことは,高橋の在籍した時期の工部大学校でも実証される。1883年を例にとると,在籍生の75％は士族出身であった[70]。工学寮／工部大学校の都検（principal,教頭）だったダイアー（Henry Dyer, 1848-1918）は,立身出世を求める学生たちに「エンジニアこそ革命家だ」と奮起を促した。そして実際,旧社会の支配層だった武士が被支配層の職分であった工業を担う近代日本の工業化の特色が現出した,と三好信浩は述べる[71]。三好の調査によると,卒業生の多くは実業・研究・教育の分野で大きな業績を残した。「卒業生」でも工業人材でもなかった高橋だが,大倉組ロンドン支店長や商業学校長を歴任したその活躍もまた,同時代に極めて顕著な業績であったことだろう。

そのような進路選択にもまた,「佐幕」の影が差している。科学史家の坂本賢三によると,「政官界は薩長土肥の雄藩によって固められて」いた。従って,「旧幕臣や佐幕派諸藩出身の士族たちは医理工系研究者になる道を選」ぶ外なかった[72]。村上陽一郎も次のように語る[73]。法学部などでは町民の学生の方が多かったのに対し,「工学校だけは士族の子弟の方が圧倒的に多」かった。町民の生きていく術は,維新に関わらず,基本的に変化はしなかった。しかし士族,「とくに幕藩側に属していた人たち」はそうではない。「それで社会建設に協力できるなら,これは非常に生き甲斐があるという意識で,とくに旧幕の下級士族たちがこぞって」工学系の学校に流れたのだ,と。具体的な立証はできないが,高橋のキャリア選択にもそのような力学が働いていたということは,十分にあり得る。

彼の人生の随所・要所で,同郷や同窓,同職の絆や人脈が威力を発揮したことも,以上の議論と無関係ではあるまい。明治初期,相互異邦人状況を孕みつつ成長する都市東京は,それ故に様々な「社会的結合」の生じる場でもあった。「郷友会」といった名称で集う同郷人の互助組織が多数誕生したが,長岡のような「賊藩」の絆意識は他に比してもより一層強いものだったかも知れない[74]。士族というのは「隣に他人というふものゝ住み得ることを,少しも考へて見ぬ様な経歴」を有した者たちだった,という柳田の分析が当を得たものであったとすれば,また尚のことである[75]。「長岡社」のような郷友会

に高橋が所属したかは分からない[76]。だが，前稿で見た小西信八，井上円了，市島謙吉といった同郷同学の縁や大倉組・ロンドン時代の縁，そこから拡がった人脈は，高橋の骨相学普及活動に存分に活かされた。絆の重要性それ自体は今日も変わらないが，その有した意味にはとりわけ大きいものがあったに違いない。

新時代の「医者」

長岡出身の高橋が，以上のような背景やモチベーションの幾許かを意識し，有していた可能性はあろう。彼自身の言辞を引き，分析を今一歩進めよう。

先ず，高橋の骨相学に対する態度がよく表れた一節を見ておく。

> 他日の誤解を避けん為一言致し置きたきハ余の評論ハ主としてゴール博士の脳皮質局部作用説に基き一面生理的素因に鑑み被験者現時の心性状態に就き推測を下だすに過ぎずして過去も言はず未来も説かず況して吉凶禍福の判断の如きハ拙技の範囲内にあらざるなり又余ハ凡て観たる人識りたる者等に就き猥に評論を公にするものにあらず被験者自身の承諾あらうものに限り漸次概評を試みんと欲するに止まるなり[77]

これは読売新聞で一か月間連載された「朝野紳士の骨相」の，その初回冒頭部分である。骨相学が，当時もしばしば誤解されていた「吉凶禍福の判断」の占いではないことが断られるとともに，興味深くも，一種の彼の研究倫理がそこに表明されている。ガルの提唱した脳の生理学に基づき，著名人の「心性状態」を診断するのが連載の主旨だが，間違っても当人の承諾なしに診断を下すようなことはしない，と言うのだ。

「初め医に志し」たとされる高橋が，最先端たる光輝の英国で出会ったのが，人間科学としてのフレノロジーだった[78]。今日であれば相対化される“一つの文化”として西洋科学を捉えることもできようが，当時の少なからぬ日本人の目にはそれは殆ど“真理”に等しいものと映ったはずだ。その自然（nature）科学の進歩が，人間の本性（human nature）をも解明した。高橋はそのような科学の一つとして骨相学を受容したに違いない。高橋とは別に，日本で初めて骨相学に関するまとまった著作群を発表した人に市川紀元二（1873-1905）がいた。彼もまた東京帝国大学工科大学で電気工学を修めた工学士であった[79]。高橋や市川のような，西洋科学の訓練を受けた新時代の理工系人材がフレノロジーに魅惑された，というのもまた故無きことではなかったのだ。

では，なぜ骨相学だったのか。高橋においては，人間を能力の束として表象する“能力人間学”をそこに看取したからであろう。それは必ずしも“新しいメリトクラシーの時代が到来したから”ということを意味しない。確かに，江戸時代から勘定所の役人，即ち数学人材は能力主義的登用が行われてきたと言われ，（幼少ゆえ意識する機会はなかっただろうが）高橋にもその空気は身近であったかも知れない[80]。しかし彼にとっては，メリトクラシー世界への参画でもなく，テクノクラート的な国力のカウント（計算可能性）よりも先に，ただ素朴に「人間」を科学的に知ろうとしたことが，骨相学への没頭の理由だったのではないかと筆者は考察する。

明治維新によって，最も“何者でもなくなった”のは，高橋のような人間であった。「武士」として生まれ，その境涯の中で教育を与えられ文武や身体作法を身に付け始めていた高橋は，凡そ“人外”のものから“人”になったその時（七つまでは神のうち）に，世界からその属性が失われ，本来辿るべきだった轍は消滅した。「賊藩」の「士族」の少年が，当地で「心性の研究」へ「傾注」する心を萌したこともむべなるかな，である[81]。

それでも，新時代は類似した目的地へ続く“学歴競争”の道を新たに設えた。その道に乗り，うまくいけば，能力主義的世界において社会的位地を占め，“何者”であるかが獲得される。或いは，統治権力はいかなる“能力”が有用か否かをそれらの概念の創出とともに選定選別し，育成や測定・評価を行って，配置や処置を行う。象徴化されたテクノクラート――F・ハイエク（1889-1992）の言葉を借りれば，「計画的に構成されていないどんなものにも意義を認めようとしない…統括的精神」を有する者ども[82]――は，あくまで或る体制内において，“自然”を改変し征服する“技術”によって進歩を獲得していくことを信念とするホモ・ファーベルである。人間の自然もアナロジカルに認識され，往々“自然の開拓”たるその改造を指して「教育」と人は呼ぶ[83]。“能力人間”は，メリトクラシーの構成員であると同時に，統治客体ともなる。高橋は新時代の“エリート”へ続くはずの道を歩んでいた。骨相学の関心はそれらと結びつき得る。だがそれよりも，高橋が何より希求したのは，そも自分という「人間」は何者なのかという問いと，それに対して客観的で分析的な解答を与えることのできる真正の“何か”だったのではないだろうか。

高橋は自分が何者であるのかを，骨相学を用いることで科学的に知った。それの与えた“解答”は“本性的”なものであり，武士の身分に在っても異郷に在っても，この先更なる新時代の訪れが来ようとも，変わることのない“自然の人間そのもの”であるはずだった――「教育可能性（educability）」という用語の普及が骨相学に依るのであるから，それが教育による可変性を否定するものでなかったことは言うまでもない[84]。

「知は力なり。自己についての知（Self-Knowledge）

は，自己を守り保つ」とは，彼が在英時代に贈られた骨相学者モーガン（Nicholas Morgan）からの言葉である[85]。高橋は骨相学によって「自己」を知り，そして要望に応じて，他の人々も診断した。それは「生理心学」を修めた自然科学者の姿に留まらない。さながら，通俗的な“医者”のそれであり，その自意識に依った営為とも映る[86]。江戸時代の養生書の書き手は必ずしも訓練を受けた医師ではなかった。また，医師ガルは彼の脳神経生理に関する学説の講義を自宅で始め（当時のウィーンでは普通のことだった[87]），講演と著作で衆人への普及に努めた。高橋もまた，時代における個人と社会の養生／衛生を担う“医者＝教育家”たらんとしたのかも知れない。

結び

“時代の科学”になれなかった骨相学

生理心学の知は，西洋化時代の荒波に晒される身心を養い衛る術を人々に示し，他方では「都市化」「四民平等」「メリトクラシー」等と評される新しい社会に出現する“異邦人たち”に，科学的で客観的な“自分探し”の指針や解答を与えようとした。高橋にとっての骨相学は，そのような有用性を発揮する“真正の科学”だった。そして，明治大正の世の中に少なくなかったはずの“高橋のような人たち”にも，そのような意義を持ち得たのが骨相学だったのである。

しかし実際に，骨相学が近代日本の“時代の科学”になることはなかった。同時代の英国でも正統性が全く喪失していたわけではなかったし，当時の日本社会にその“小ブーム”と呼びうるような種々の痕跡を史料から拾い集めることはできる[88]。だがそれは端的に言って，遅かった，のだ。機能局在論の先駆として再評価する動きはあったものの，脳神経科学におけるその内容精度は，やはり過去のものとなっていた。心理学説としても然り。養生法やコミュニケーション術，進路指導や能力訓練にしても，骨相学でなければならない理由は最早なかった。

ところで，同じ頃の日本で“正統な科学”の席を狙っていたのは骨相学ばかりではなかった。例えば「催眠術」は，千葉の成田中学校（1898年創立）の校長だった竹内楠三（1867–1921）が退職後に次々と専門書・翻訳書を発表したことが火付け役となり，1903年前後に日本中で流行していた[89]。高橋の東京心性学館が設立され，当館で三宅辰次郎が催眠術の施術を行っていたのも同年のことである（前稿）。催眠術師・山口三之助が帝国教育会の講習会で行なった講演録は，『教育公報』（1903）に掲載された[90]。同年に『教育上に応用したる催眠術』を世に問うた山口は，本文中で催眠術に対する世間の「誤解」を憤り，「心理学及び催眠学を知らぬ者は，教育家として最大義務責任を怠る者であつて，真正の教育家と称するの価値はないのである」と嘯いた。こうしてみると，“高橋のような人物”や“骨相学のような新科学”が世紀転換期の日本に蠢いていたことが判る。そして一等興味深いのは，それらが往々にしてコネクトを求めたのが「教育」分野であった，という事実であろう[91]。

因みに，その中でもかつての西洋での骨相学ブームに部分的にも比肩しそうな“時代の科学”の雰囲気を帯びたのは「千里眼」だった。W・レントゲン（1845–1923）のX線観測やキュリー夫妻（夫 1859–1906；妻 1867–1934）のラジウム検出等，西洋から届く科学的驚異の報が，研究者から大衆までを“見えない光線”への熱狂に駆り立てた（“X 線教育法”の提言まで存在した[92]）。千里眼という“未知の透視能力”もまた，科学的発見を俟つものかも知れない。事態は，しかし長続きしなかった。擁護派の福来友吉（1869–1952）東京帝大助教授が解雇され，“千里眼能力者”たちが自殺するなど，スキャンダラスな結末を迎える事件の詳細については，先行研究を参照されたい[93]。

潜行していた思想的影響？

200 年前，骨相学は魂＝心の議論の場を哲学から生物学に移し変え，「実証主義」（A・コント）の世界へと引き込んだ。新興する都市化とも相俟って，西洋世界ではその脳科学－観相学は“時代の科学”として人々からの熱い支持と期待を集めた。ところが，それから100年後の日本に，骨相学の占め得るそのような科学的・社会文化的位置は殆ど存在せず，従って高橋の冀望が実現することも終になかった。それでも，世紀転換期の人間測定論を始めとした新しい研究にインスピレーションを与える役を，骨相学は果たすことになる。例えば，A・ビネー（1857–1911）が1905年に最初の知能検査を発表した時，その研究の出発点は骨相学的な頭蓋測定による「知能」の数値化の試みであったし，類似の経緯から犯罪人類学を創唱したC・ロンブローゾ（1835–1909）にしてもそうだった。彼らを通じて近代日本にも骨相学の残響が鳴りつつあった。

ともあれ，本稿が最後に注目するテーマは，骨相学の有つ教育史的意義である。教育思想との関係において，その勘所は何か。筆者はそれを，分析的な精神能力のリスト・語彙を作成し人々に提供したことにあると考察している。例えば，今日の学校教育論議でも頻繁に耳にする「自尊心」「自尊感情」の原語“self-esteem”は，「骨相学を通じて一般に普及した」と言われている[94]。人々は言葉によって思考を構成し，コミュニケートする。西洋由来の言葉であれば，翻訳によって用語は必ずしも一致した形をとらないが，それらの形相・概念は異郷たる近代日本にも写し取られよう。

さて，近代以降の日本の教育言説において欠くことのできない語・概念に，ここまでも論究してきた「能力」

が在る。もとは西洋思想文化の移入によって登場し，定着した語であった[95]。それでは，開化期の日本人はそのような新奇の概念や“能力人間像”を一体どこから手に入れたのだろうか。ここに，近代日本における骨相学受容史のもう一つのストーリー（history）が伏在する可能性がある。

科学としての骨相学は，代替物が次々と現れて来て，様々な面から“無用”となっていた。だが，世紀転換期の日本に骨相学を不要にした一つの原因に，それより以前に，それと知らずに能力人間学たる骨相学の思想を受容していたことがあるのではないか。高橋が「生理心学」の普及に取り組んだよりずっと前に，日本人は骨相学的な能力概念の体系を，それと知らずに摂取していたのではないか。骨相学の受容を，思想或いは人間観の次元において教育史学の立場から検討するのは，次稿である。

註

1　平野亮「日本の骨相学者高橋邦三の伝」『国際井上円了研究』10号，国際井上円了学会，2022年，259-299頁。

2　平野亮「近代日本における骨相学のカルトグラフィー(1)」『兵庫教育大学研究紀要』56巻，2020年，2-3頁。

3　高橋邦三「生理心学一斑」『教育公報』235号，1900年５月15日，20頁。

4　pseudoscience の語は，仏の生理学者マジャンディが骨相学を批難するのに用いたのが初出とも言われてきたが，1796年に既に英国の歴史家アンドリュース（1737-1797）が錬金術を指して用いた例のあることが現在は指摘されている（See note 19, pp. 480-481）。

5　Roger Cooter, “Phrenology and British alienists, c. 1825-1845,” *Medical History*, vol.20, no.1, 1976, p. 9.

6　短命な学会も少なくなかったが，ロンドンを含め英国各地に林立していた（Roger Cooter, *Phrenology in the British Isles*, Metuchen: The Scarecrow Press, 1989, pp. 382-396）。なお，一般的な地方のアカデミーや学会の活動ピークは1870年代頃で，全国学会のような統一的なものの登場は，鉄道網の普及したこの時期以降に俟つ（中山茂『パラダイムと科学革命の歴史』講談社学術文庫，2013年，177頁）。

7　John van Wyhe, *Phrenology and the Origins of Victorian Scientific Naturalism*, Aashgate, 2004, p.129.

8　高橋の蒐集した骨相学書のコレクションは，現在も東京大学総合図書館に引き継がれ所蔵されている（平野亮「東京大学総合図書館所蔵の骨相学関連文献」『研究論叢』28号，神戸大学教育学会，2022年，53-69頁）。

9　「朝野紳士の骨相 石黒男爵（つゞき）」読売新聞，1903年９月18日朝刊，３頁。

10　William Windsor, *Lectures on Phrenology and Choice of Professions: or How to Become Rich*, William Windsor, 1889.

11　小島比呂志・奥野クロエ『心はいつ脳に宿ったのか』海鳴社，2017年，242-248頁。

12　legislation.gov.uk, <https://www.legislation.gov.uk/ukpga/Geo4/5/83/contents>, accessed April 10, 2022. なお，本法は改正を繰り返しながら今日もなお有効である。

13　オーウェン・デイヴィス『スーパーナチュラル・ウォー』（江口之隆訳）ヒカルランド，2020年，169-171頁。

14　兵庫県教育史編集委員会編『兵庫県教育史』兵庫県教育委員会，1963年，199-214頁。

15　神戸市教育史編集委員会編『神戸市教育史』第一集，神戸市教育史刊行委員会，1966年，305-308頁。

16　教育ジャーナリズム史研究会編「私立兵庫県教育会雑誌／兵庫県教育会報／兵庫教育（217号～326号）」『教育関係雑誌目次集成 第Ⅳ期』16巻，日本図書センター，1993年，137-144頁。

17　「生理心学一斑」というタイトルの記事は，『教育報知』と『教育公報』（共に1900年）にも掲載されている。これらに『京都商業学校同窓会報告』所収「会長高橋邦三氏の最新生理心学談」（同年）を加えた４本は，ほぼ同一内容である。最初に発表されたのは『私立兵庫県教育会雑誌』のもので，他３本は，1900年５月３日に高橋が教育倶楽部（1899年11月14日に帝国教育会内に設置。部員に沢柳政太郎, 伊沢修二, 高嶺秀夫，成瀬仁蔵，小西信八ら）で行った講演をもとに執筆された『教育公報』の記事をオリジナルとする。前者にはやや記述に簡素な箇所もあるが，その検討によって，基本的に後者３本もカバーしたと言って差し支えない。

18　西洋の骨相学者たちは模型のみならず動物や囚人の脳標本を持参して講演に臨み，時に解剖の実演もまじえた。熱烈な骨相学信徒の一人だったH・スペンサー（1820-1903）は，11，2歳の頃に骨相学者シュプルツハイムの講演に参加した際，ズラリと並べられた歯を剥き出しに笑う頭蓋骨を見て不快感を抱いたと，自伝に書き残している（Herbert Spencer, *An Autobiography*, vol. 1, London: Williams and Norgate, 1904, p.200）。

19　創始者ガルは，実際は皇帝の侍医であったわけではないが，当時の有力者を多く診療した医師だった。医学生時代の細かな史料も調査分析した次の最新成果を参照。Stanley Finger & Paul Eling, *Franz Joseph Gall*, Oxford University Press, 2019.

20 “天才は一種の狂気であり一種の神経病である”といった言説として人口に膾炙したイタリアのロンブローゾの説が『天才論』のタイトルで翻訳・出版されたのも，丁度この頃（ツェザアレ・ロムブロゾオ『天才論』（畔柳都太郎抄訳）普及舎，1898 年）。

21 但し，そのうちの「キュヴヰール」や「ブルメンバーフ」は，比較解剖学者のキュヴィエ（1769-1832）とブルーメンバッハ（1752-1840）であると思われ，ガルの同時代人たちを「近時」と言い得るかは微妙だろう。

22 前註 14，207頁。

23 高橋の示した成人男性の脳重量の平均値は，1916 年に夏目漱石の死後解剖を担当した長与又郎（1878-1941）の言に一致する。因みに，漱石の脳重量は 1425g で，「平均ヨリハヤヤ重イ」。「絶対的デハアリマセヌガ大体ニオイテ脳ノ能力ガ普通ノ人ヨリ優ッテイル」との由（夏目鏡子『漱石の思い出』文春文庫，1994 年，413 頁）。

24 「動物性」と「植物性」の二分法は，アリストテレス『霊魂論』に起源を持つ，生命機能の説明法。生命維持のための自律的な生理を「植物性」と呼ぶ。

25 この頃の「脳力」という用語については，平野亮「「能力」と「脳力」」『兵庫教育大学研究紀要』53巻，2018年，9-20頁を参照。

26 文部省百科全書『教導説』の「体ノ教（Physical Education）」にも，乳幼児の肉食の禁が述べられる（箕作麟祥訳，1873年，上篇，7丁ウ）。そこに参照を指示された同『健全説〔*Preservation of Health*，養生篇〕』では，「臓腑」の構造からして「菜肉相混ジテ食」することがヒトの自然の摂理であると解説された（錦織精之進訳，1874年，上篇，7丁オ）。

27 中野光・菅原亮方「「教育公報」と帝国教育会」『帝国教育会機関誌『教育公報』解説編』大空社，1984年，145-165頁。

28 このような３パート構成が高橋の論説の典型であり，その最後の論考と思われる『東洋哲学』（1912）掲載の３本にまで凡そ踏襲されている。

29 長谷川泰訳『骨相学』文部省，1876年。

30 例えば，“Phrenology” の命名以前に発表されたシュプルツハイムの著 *The Physiognomical System of Drs. Gall and Spurzheim*, London: Baldwin, Cradock, and Joy, 1815 にも，既に論難とそれへの反駁が載っている（pp. 236-237）。

31 東京帝大医科大学病院で実施された中江兆民の死後解剖の際，医者の申出を親族が了承し脳の剖検が行われた。中江は「一種，果たして異様な脳髄」を有していたという（伊藤仁太郎『怪傑伝』平凡社，1935年，43頁）。

32 槇山栄次『教育教授の新潮』弘道館，1908年，115-118頁。

33 前註２。平野亮「フレノロジー・レセプション（明治大正篇）」『兵庫教育大学研究紀要』57巻，2020年，20-21頁。

34 衛生局の命名は，初代局長の長与専斎（1838-1902）が『荘子』から採用したことによる（長与専斎「松香私志」『松本順自伝・長与専斎自伝』（小川鼎三・酒井シヅ校注）東洋文庫，1980年，139頁）。流行語としての歴史については，小野芳朗『〈清潔〉の近代』講談社メチエ，1997年，140-148頁を参照。

35 小野，同上，22頁。

36 瀧澤利行『近代日本健康思想の成立』大空社，1993年，161-163頁。但し，「衛生」を名乗った書籍の方では “脳神経” が扱われていなかったという調査結果も示されており（184-186 頁），その含意する所は未解読である。

37 川村邦光『幻視する近代空間』青弓社，1990年，105頁。

38 川村邦光「脳病の神話」『日本文学』45巻11号，日本文学協会，1996年，15頁。

39 竹内洋『立志・苦学・出世』講談社現代新書，1991年，100-104頁。

40 度会好一『明治の精神異説』岩波書店，2003年，164頁。

41 同上，179頁。

42 瀧澤利行『健康文化論』大修館書店，1998年，26-30頁。養生書は庶民が購入するには高価だったため，貸本屋によって普及した。

43 朝日新聞社編『明治大正史Ⅳ 世相篇』朝日新聞社，1931年，331-337頁。柳田は，「養生」は生活に余裕のある者だけのものと考えていた貧困者も，言葉がないだけで実際には養生実践（「呪禁祈祷」も含めて）を広く行っていたことを指摘している。

44 時代はやや下るが，「教員の神経病」という1911年の記事には，「不平の声，悲嘆の吐息，悶躁の叫び，苦悩の唸き」が，神経を病んだ「現時小学校教員」から聞こえてくると述べられている（MS 生「教員の神経病」『内外教育評論』8巻11号，1914年，44-46頁）。

45 鬼頭宏『図説人口で見る日本史』PHP 研究所，2007年，130-132頁。

46 J. G. Spurzheim, *Education*, 12th American ed., New York: Fowlers and Wells, 1854.

47 菊池芳樹「明治初期の都市人口」『都市』（藤田弘夫・吉原直樹編）ミネルヴァ書房，1987年，255-256頁。

48 前註45，128頁。

49 文化史家シヴェルブシュの引証が当時の状況を鮮やかに示す。1838 年の『鉄道タイムズ（*The Railway*

Times)』に，客車に見知らぬ人々と閉じ込められた「旅行中の監禁」に関する投書が掲載された。話しかけることもないまま同じ空間で過ごす見知らぬ者どもとの顔を付き合わせた長時間は，手持ち無沙汰を越えて苦痛だ――そのような訴えは，会話による「陽気なコミュニケーション」が常態だったそれまでの馬車旅行においては生じ得ない類のものだった。旅客が背中合わせに座れる座席を設置するのはどうか，そうすれば車窓に流れる景色を眺めることができるではないか。「こうする方が，よりよい仕事がないために，３時間ないし４時間の絶え間なき観相術（Physiognomy）に従事するよりも，楽しいことは請け合いだ」。同じ頃のフランスでも，骨相学と観相術の語は通俗的には区別されずに用いられており，西洋での大衆的骨相学流行の都市的要因を物語っている。（ヴォルフガング・シヴェルブシュ『鉄道旅行の歴史』（加藤二郎訳）法政大学出版局，1982年，99頁。訳は一部変更）

50　ゲオルク・ジンメル『社会学（下）』（居安正訳）白水社，1994年，252頁。

51　高山宏『殺す・集める・読む』東京創元社，2002年。

52　坪井秀人「KNOW THYSELF？」『偏見というまなざし』（坪井秀人編）青弓社，2001年，25-49頁。

53　坪内逍遙『小説神髄』岩波文庫，2010年，180頁。逍遙は早稲田大学教授も務めていたので，市島を介した高橋とのつながりもあったかも知れない。新潟県下の専門学校を巡回講演した折のと或る懇親会で，「骨相学」についての講演を行って大喝采を浴びたとの報道も残る（「茶話 坪内逍遙の骨相学演説」読売新聞，1899年８月23日朝刊，２頁）。逍遙は，井上円了が立ち上げた不思議研究会（1886）にも参加していた（菊地章太『妖怪学の祖井上圓了』角川選書，2013年，73頁）。

54　村上信彦『明治女性史』上巻，理論社，1969年，37-67頁。但し，当時の新聞に散見された「元家老の餓死」「士族の妻子が娼婦に」といった記事には「興味本位の雰囲気」があり，事実不詳の事も少なくなかったという（落合弘樹『秩禄処分』中公新書，1999年，197-198頁）。

55　園田英弘『西洋化の構造』思文閣出版，1993年，128・164-174頁。

56　同時代の米国では，丁度このメリトクラシーの信念が熱烈に奉じられていた（森本あんり『反知性主義』新潮選書，2015年）。反知性主義とその原点たる徹底的な平等主義の理念から，“分を超えた”能力開発と成功こそが是であると謳われた。実際には，産業が急速に成長してゆく19世紀末にあって，学の無い者が成り上がることは困難になっていたが，“信念としてのメリトクラシー”は強力で，現代なお世代や党派の左右を超えて深部にまで根を下ろしたそれが米国社会を強く規定している（マイケル・サンデル『実力も運のうち』（鬼澤忍訳）早川書房，2021年）。

57　松沢裕作『生きづらい明治社会』岩波ジュニア新書，2018年，61-77頁。

58　平野亮『骨相学』世織書房，2015年を参照。

59　同上，第４章。

60　杉本つとむ『増訂 日本翻訳語史の研究』八坂書房，1998年，439-451頁。

61　福澤諭吉『時事小言』山中市兵衛，1881年，304-320頁。

62　広田照幸「旧士族の生活世界と学歴」『学歴主義の社会史』（天野郁夫編）有信堂高文社，1991年，165-174頁。興味深いことに，広田がインタビューした「本人世代」は，「私をなんとか高女に入れたがって…」とか「「どん百姓に負けるな」と親からよく言われ…」といった親からの声掛けに「士族」意識を強調された経験を有していたのに対して，次世代にはその傾向が殆ど見られなくなっていたという。

63　竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社，1999年，171頁。

64　前註39，40-50頁。

65　三谷博「「新しい日本，万歳！」」『図書』岩波書店，2021年８月号，14頁。

66　天野郁夫『学歴の社会史』平凡社ライブラリー，2005年，39頁。

67　長岡市編『長岡市史』長岡市，1931年，640頁。

68　吉田昇「明治時代の上京遊学」『石川謙博士還暦記念論文集』大日本雄弁会講談社，1952年，429-442頁。

69　木村毅『明治文学夜話』至文堂，1975年，13-27頁。

70　『工部大学校第貳年報 自明治十六年四月至明治十七年三月』175頁（『明治初期教育関係基本資料 其之三』湖北社，1981年）。

71　三好信浩『明治のエンジニア教育』中公新書，1983年，196頁。

72　坂本賢三『先端技術のゆくえ』岩波新書，1987年，149-150頁。

73　村上陽一郎（インタビュー），『Illume』12巻１号，東京電力，2000年，38頁。

74　当時，新聞広告を用いて同郷人への呼びかけがしばしば行われた。旧藩を前面に押し出した広告の例に成田が挙げたのは，1881年10月21日付朝野新聞の「在京長岡藩諸君に稟告す」だった（成田龍一『近代都市空間の文化経験』岩波書店，2003年，71頁）。

75　前註43，157頁。

76　同時代の医学者・小金井良精（1859-1944）は，長岡

出身者の寄り合いである「長岡社」に時折参加した。その妹で鴎外の妻・喜美子が私的に開いた長岡出身の「老婦人」の会合には，河井継之助の妹（牧野の未亡人）の姿もあった（星新一『小金井良精の記』河出書房新社，1974年，105・194-198頁）。同郷の長谷川泰も，自身創立の済生学舎の「北越人懇親会」で「同郷人の団結」なる演説をぶっていた（長谷川泰『同郷人の団結』依田恭助，1894年）。

77 「朝野紳士の骨相 大隈伯」読売新聞，1903年９月12日朝刊，３頁。

78 永峰春樹編『思出のまゝ』永峰春樹，1928年，25頁。

79 横山英『市川紀元二中尉伝』真人社，1941年。

80 行政に不可欠であるにも関わらず武士が算術を賤視していたため，慢性的人材不足に陥っていたこと等が理由とされるが，それ故に「算術から身分制度が崩れる」という現象は18世紀の世界史的潮流であったという（磯田道史『武士の家計簿』新潮新書，2003年，19-23頁）。江戸時代の能力主義言説を読む一次資料として，８代将軍吉宗の「隠密御用」だった荻生徂徠の『政談』（原1727年。辻達也校注，岩波文庫，1987年，巻之三）も参照。

81 高橋邦三「英語實驗談（一）」『日本及日本人』477号，政教社，1908年２月，48頁。

82 F・A・ハイエク『科学による反革命』（佐藤茂行訳）木鐸社，1979年，163頁。

83 宮澤康人『「人間関係」の歴史人類学』学文社，2011年，143-160頁。

84 “educability,” Online Etymology Dictionary, <https://www.etymonline.com/word/educability#etymonline_v_50286>, accessed April 10, 2022.

85 前註８，56頁。

86 医師免許制度の完成は1883年（小川鼎三『医学の歴史』中公新書，1964年，209-216頁）。因みに，観相学は「自然科学」であり（前註58，36頁），近世日本でも裁判を通じて医学と見なされた例があった（中山茂春「石龍子と相学提要」『日本医史学雑誌』55巻３号，日本医史学会，2009年，371頁）。

87 See note 19, pp.38-43.

88 前註２，5-8頁。

89 一柳廣隆『〈こっくりさん〉と〈千里眼〉』講談社メチエ，1994年，75頁。

90 山口三之助「最近催眠術の進歩」『教育公報』276号，1903年10月，8-19頁。

91 催眠術には仏教界との接近も見られた。仏教界に出現した「科学化」を志向する各派は，「宗教と科学の交差する」領域として催眠術に期待を寄せた（碧海寿広『科学化する仏教』角川選書，2020年，66頁）。他方，新宗教の簇生によるオカルト思潮の台頭を危惧した政府は1908年に「警察犯処罰令」（内務省令16号）を発出し占いや催眠術を取り締まったが（沼尻正之「近代日本におけるオカルト・ブームと新宗教」『宗教と生活』岩波書店，1999年，190-195頁），そこに「骨相学」が明記されることはなかった。

92 「X 光線の新利用（一）児童改善の方法」読売新聞，1910年９月４日朝刊，10頁。

93 前註89。東京帝大講師・藤原咲平と院生・藤教篤による記録「千里眼実験録」が，『近代庶民生活誌』19巻（三一書房，1992年，519-551頁）に翻刻されている。

94 “self-esteem,” Online Etymology Dictionary, <https://www.etymonline. com/word/self-esteem#etymonline_v_23146>, accessed April 10, 2022.

95 前註25，9-12頁。

［付記］本論文は科研費（19K14063）の助成を受けた研究成果の一部である。